

男と女の不完全マニキュアル

冥王星の男と女

薄井ゆづじ



株式会社ウィアックス

冥王星の男と女

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
紅 茶	解 凍	異 星	道 具	雪 女	線 路	放 流	坂 道	夕 立	岸 辺

岸辺

男と女のあいだには大河が流れているらしい。

本当かどうか、見に行ってみた。

岸辺は、男岸という。対岸は女岸である。川幅は広く、女岸は霞んで見えない。岸辺には人がいっぱいいるのではないかと思ったが、見えない遠い女岸の方向をぼんやりと見詰めている人が数人、ちらほらとしゃがみこんでいるだけだった。

その誰かが老人だった。ここは老人ばかりが集まる場所なのか。もしかしたら対岸を見詰めているうちに年老いてしまい、老いたことにさえ気がつかないのかもしれない。

私も対岸のほうを見た。霧のために何も見えない。と思っっているうちに、ぎい、と音がして霧のなかから一艘の舟が現れると私が立っているほうへ近づいてきた。ぎいぎい。舟は女が漕いでいた。女は岸辺に舟を寄せると、

「ねえ」と言った。「乗らない？」

「私が？」

「ほかに誰がいるというの。しゃがみこんでる年寄りばかりじゃない。若くて立っているのは、あなただけ」「若くて立っている？」

「繰り返さないでよ、もう」

女が下卑た笑いをした。何が、もう、なのかわからない。女の笑い声は霧の川面に吸いこまれるようにして消えた。

「乗るんでしょう？ さあ、早く。いま乗らないと、乗りたいときに乗れなくなってしまふよ。女って、そういうものなの」

女は、また下品に笑った。何が可笑しいのかわからない。周囲に点在するようにしゃがみこんでいる老人たちは顔をこちらに向けて、誰もがうらやましそうな表情をしている。あの人たちは、乗りたくても乗れなくなってしまったのだろうか。

「およしなさい」

私が舟のほうに近寄ろうとすると、しわがれた声が聞こえた。老人の一人が、私に声をかけたのだった。

「悪いことは言わない、その舟に乗るのはよしなさい」

「ご自分が乗れなかったから、そんなふうにおっしゃるのですか」

「そうではない」

「なんでしたら代わってあげてもいいですよ」と私は言った。「代わりに、どうぞ」

老人に舟のほうを指し示すと、老人はゆるく首を揺すった。

「乗りたくないのだよ。その舟は、一度乗ってしまうと、降りるのがひどく困難なんだ」

「ということは、舟に乗ったことがあるんですね」

その質問には答えず、老人はまた首を振ると、私から視線をはずしてまた遠い、見えない対岸のほうへ目をやった。

「乗るの、乗らないの？」女が言った。「私、そんなに待てないからね。乗らないんなら、ほかの男を探しに行かなくちゃならないの。賞味期限っていうものがあるのよ、女には」

「乗る」

私がそう言うと、さっきの老人が何か呻くような声を漏らした。舟の女は嬉しそうに微笑んだ。

「はじめから、乗りたくてしかたがなかったんでしよう。早くそうおっしゃいな。いくらでも乗せて差し上げますのに」

私を乗せた小舟は男岸を離れた。さっきの老人は心配そうにこちらを見ていたが、すぐに霧のむこうに隠れて見えなくなった。

女は無言で舟を漕いでいる。舟は川面を滑るように川下へ向かっている。

「ねえ、対岸へ行くんじゃないの？」

「女岸へ？ まさか。そんなところへ連れていったら、あなたをほかの女に取られてしまう。あなたは、私だけのもの」

けたたましい声で女が笑う。視界は霧ばかりで、兩岸とも見えない。真っ白なカーテンに覆われた小部屋にいるような息苦しさを感じた。

「何をしてもいいのよ」と女が言った。「ここなら誰にも見られないから」

何をしてもいいと言われても、特にしてみたいことなどなかった。女は着ていた衣服を脱いで全裸になった。暑いのかと思ったがそうではなく、私に乳房などを触らせようとしているのだった。

「かまわないのよ、触っても」

「べつに、いいよ」

「ここも、触っていいのよ」

「だからさ、そんなことするつもりはないし。したいとも思わないし」

「じゃあ、何がしたいのお？」

女の声は、甘ったるく耳にへばりついた。

「強いて言えば、さっきの岸边に戻りたい。ここには何も無い」

「私がいるじゃないの」

「あんたしかいない。さっきの岸边に戻れば、やりたい仕事が残ってるし、友人はいるし、旅に出たり、歌を唄ったり、居酒屋で酒に酔ったり、映画だって観られる」

「そんなことより、私のほうがいいに決まってるじゃないの。ウブな人ねえ。そんなところが可愛いんだけど」

「うっぷ。よさないか」女は巨大な乳房を、いきなり私の顔に押しつけてきた。「なんてことをする。窒息したらどうするんだ」

「ふふふ。窒息させてあげる。そして、男岸のことをすっかり忘れさせてあげる。さあ、私と一緒にパラダイスへ行くのよ」

「いやだ。うっぷ。離さないか。この舟から降ろしてくれ。私は泳いででも岸に帰りたい」

「そんなことをしたら、どうなると思ってるの」

「自由が待っている」

「自由……。男の人って、どうしてそんなものを欲しがるのかしら。私に縛られることが、一番の幸福なのに。あっ、待ちなさいったら」